

異文化との接触による「自我」の変容  
～物語的アプローチにかえて～

同志社大学社会学部社会学科社会学専攻

学籍番号 12022084 鶴 裕美子

指導教官：立木茂雄教授

キーワード：自我，参与観察，異文化

## 目次

序論		1
第一章	1 研究の目的	1
第二章	2 研究方法	
	2-1. 参与観察——ホワイト「ストリートコーナーソサエティ」を元に	
	2-2 物語論的接近——浅野智彦「自己への物語的接近」を元に	
第三章	3 自我の枠組み	8
	3-1 自我とは	
	3-1-1 ミードの「自己論」の枠組み	
	3-1-2 浅野智彦「自我の社会学」の枠組み	
第四章	4 自我の変容の記録	11
	4-1 それまでの私	
	4-1-1. フィールドワーク以前の自己物語	
	4-1-2. フィールドワーク以前の「自我」への考察	
	4-2 異文化<他者>との接触	
	4-2-1 イスラム教徒アフメッドの参与観察	
	4-2-2 異文化<他者>から受けた「自己」への考察	
	4-3 帰国後の再適応	
	4-3-1 帰国後の記録	
	4-3-2 帰国後の再適応への考察	
第五章	5 考察	30
第六章	6 結論	31
	あとがき	
	注釈	
	参考文献	

## 要約

「自分」をいうものがごく自然に前提とされているが、そもそも、その「自分」や「私」というのは何なのか。一般的には、行為を総括しまとめるべき「私」が存在している信じられているのである。人は様々な異なる文化と接することで自分らしさを形成してゆく。しかし必ずしも異質なモノを受容するばかりではなく、時には排除したり、異文化を持つ他者に対して同化の態度を求めたりすることも起こり得る。過去の異文化受容に関する研究では、異文化を持つ少数派に対して行われてきたものが多く、異文化を受容する側に焦点を当てたものは少ない。そして受容することによって、自己はどのように変容していくのだろうか。今まで抱いていた自分という曖昧な存在である自我というものを、<I>と<me>という自己の視点を持って、他者、特にここでは異文化に生きる人間との接触によってどのように変容していくかを記録し報告する。そして、今まで抱いていた自分と社会の立ち位置や、「自己」に対する捕らえかたをもう一度改めて見つめなおすことで、「自分」らしさ、そして自分の向かうべき方向性を見つけていきたいと考えた。

### 1 研究の目的

そこで、本研究では異文化を受容する側、つまり「I」という筆者本人の「自己」の立場から、異文化との接触、そして異文化受容を通じて変化していく「自己」と取り上げることで、現実社会において曖昧な認識でしか把握していなかった「自己」に対し、自己の変容を論理的に分析し考えられる要因を考察することを目的とした。

### 2 研究方法

#### 2.1 参与観察——ホワイト「ストリートコーナースサエティ」の方法を元に読み解く

参与観察とは何か。統計や数字から分析する社会学とは全く異なった調査法である。『社会学がわかる本』（朝日新聞社 2004）は以下の様に記している。

「参与観察とは、定性的社会調査法のひとつであり、観察者はフィールドワークを中心に、長期間研究対象となる社会に滞在し、その社会のメンバーの一員として生活しながら、対象社会を直接観察し、その社会生活についての聞き取りなどを行う。観

察者はフィールドノートに様々な記録をとり、それを後にデータとして扱うことがある。観察調査の記録に、テープレコーダー、カメラなどの機器を使うこともある。参与観察は、外部の人には閉ざされているような特異な集団の調査には威力を発揮する。また、社会学や人類学で、特定の社会集団を研究する際に用いられる他、家庭、教室、会社組織などに対しても用いられることがある」(朝日新聞社,2004:56-58)

この調査法を使った典型的な論文は、W.F.ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』(W.F.ホワイト,2000)である。このストリート・コーナー・ソサエティは、今や社会学的古典として参照されるに至っている。そのような評価を得るにあたったのは、この論文以前のフィールドワークの報告は、読み手の誰彼にとって研究の成果がどのように現れるかを前もって知ってしまうような事柄を、調査者が報告しているにすぎなかったのに対し、著者はほんの中で、社会学ないし、社会人類学研究にさいして、丸ごとのかたちで率直に自信のフィールド体験を叙述しているからだ。当時、まだ参与観察といった方法がメジャーではなかった時代、彼は一定の期間、コーナーヴィルのギャング集団に対してフィールドワークを繰り返し、その模様や、口頭での会話、様子を細かく記し論文とした。

その方法に対し、W.F.ホワイト(2000)自身は、書籍の結び部分にあたるアペンディクスにてこう述べている。

「私は『ストリート・コーナー・ソサエティ』でとった方法を、他の調査者達も見習うべきだと言うのではない。私の方法は、相当程度に私に特有のもので、特有の状況、また私が調査を始めた時の一般知識の状況に依拠している。しかし、多面では、現地調査の家庭には共通の要素もあるに違いない。私たちは調査がい実際になされたかの一連の説明を積み上げると、論理的で観念的なイメージ以上に、実際の調査のプロセスを叙述することができるかもしれない。」

また、調査についての注意点にこう記している。

「調査者が大学から離れて、現地に出かけ、一回数時間過ごすだけならば、現地の作業と切り離された個人の社会生活を維持することが出来る。しかし、調査者が研究しようとするコミュニティにしばらくのあいだ生活するとなると、彼の個人生活は調

査の仕事と不可分に混じりあう。そこで、調査がどのようになされたかの真の説明として、調査者が研究期間のあいだ、どのように生活したかの個人的説明を内容とせざるをえない。コミュニティでの生活の説明は、またデータの分析のプロセスを説明する助けになるかもしれない。調査で得られるアイデアは部分的には証拠立てを綿密にはかるなかで生まれる論理的な所産でしかない、しかし、私たちは諸問題は真っ直ぐな線をたどると一般的に考えてはならない」(W.F.ホワイト 2000:2-3)

つまり、W・F・ホワイトは、調査において確信した点は、調査データの実際の証拠立ては、私達が読む調査方法の公式の記述にそって現れるものではないということを述べている。そして、自身が前書きにも記すとおり、この論文の性格的な特徴は、後半に現れるアペンディクスにおいて、筆者が研究中に陥った過ちや混乱ごとを丸ごと、そして率直に記しているため、この筆者は何か遠い、近づきがたい権威というよりも一個の人間(human being)だということを、読者は知ることが出来る点である。筆者が、研究を通じて伝えたいことを、体温をもった現実味のある形で読者は理解することができ、より人間的な、いわば親近感をもった問題として捉えることが出来るのだ。私自身も、このストリート・コーナー・ソサエティを読み、登場する人物やギャング達に対し興味が沸き、その調査後の彼らの生活であり、どうなったのかと気にかけるようになった。この論文を読んだ読者は大半同じような感情に至るであろう。このW・F・ホワイトの論文との出会いをきっかけに、そして又、担当教授から、「ストリートコーナーソサエティ」風に論文を仕上げるとい指導を受けたことから、以下に記す私自身の自己の変容はW・F・ホワイト自身がそうしたように、全ての現実を丸ごと特記することを心がけた。過ちや、怒り、そして悲しみさえも、全ての感情を、データの形に変えることなく、そのままの文体で丸ごと綴ることこそが、この卒業論文の一つの特徴だということをここに記しておきたい。

また、参与観察と似た調査法にオーラルヒストリーという、個人的体験を聞きだし、調査していく方法がある。落合恵美子(2004)はこう述べている。

「客観的事実、歴史的事実を拾おうとしてはだめだ。事実だけでは個人史の持ち味は生かせない。オーラルヒストリーには、「妥当性」や「信頼性」が劣るとする批判に、かえってはまってしまう。そうではなくて、思い違いや嘘も含めて、個人の主観にど

っぷり浸かることが大切だ。厳密にいうと、参与観察とオーラルヒストリーは似て異なるものではあるが、私はこの言葉を知り、報告としての論文に対し、事実だけを取り上げて形式的な分析をするのではなく、個々の口答による言葉から出る「それぞれの主観」を大事にして記録していきたい」（落合恵美子 2004:153）

## 2.2 物語論的接近 ——浅野智彦『自己への物語論的接近』を元に読み解く

### (1)物語論的接近

「自分」をいうものがごく自然に前提とされているが、そもそも、その「自分」や「私」というのは何なのか。一般的には、行為を総括しまとめるべき「私」が存在していると信じられているのである。そして、その「自分」を主題化しようとする欲求が、例えば、何を満たせばより「自分らしい自分」「本当の自分」にいまよりなれるのかという形の問題や、自分の何が「病んでいる」のか、何が足りないのかという形で問題とされる。しかし、「自分」や「私」という現象それ自体がどのように成り立っているのだろうか。ここに、キー概念として浅野智彦(2001)が提案するのが、“自己への物語的アプローチ”である。ここで言う物語とは、人が自分自身のついて語る物語・自己物語である。このような、自己物語に着目して、自己の生成・維持・変容を探求する試みなのである。

では、なぜ自己は物語の中心なのであろうか。それは、自己を中心と見ることによって始めて行為や体験が一定のまとまりや整合性をもって現れるからである。しかし、「中心」であるのは、その人物の持つ無数のエピソードが首尾よく選択、配列されている限りであり、自分自身のエピソードを<選択><配列>して、はじめて「私」が現れる。つまり、自己が自己物語によって産み出されるのである。過去を物語へと加工することによって現在の自分を作り出している。

浅野(2004)はこう示している。

「人々は日々の行為の中で無意識のうちに一定の自己イメージを抱き、それを前提にして振舞い方を選んでいるものであるが、この自己イメージは自分自身のうちで自己物語を語り続けることによって維持されているのだ。自分がどんな人間であるのかということは、結局、自分について物語ることによってしか支えられないからだ、言い換えれば、自己とは、絶え間なく続く「心のおしゃべり」によって生み出され支えられているのである」（浅野 2004 : 6-7）

## (2)この調査法の3つの特徴

また、この物語的アプローチは3つの特徴を持つ。一つ目に、二つの世界、視点性を持つということ。そして二つ目に、出来事の時間的構造化が挙げられる。出来事を、〈選択〉〈配列〉することによって構造化する。そして、そのため一定の基準は、物語の結末によって与えられる。それは「今の自分をどのようなものとするか」ということである。つまり、語り手の視点が異なれば、選択や入れるも異なり、一つの物語はいつでも違ったように語りえる、という潜在的可能性がある。今語られる物語は、あくまでも「ある一定の視点から見たならば、という仮定法的な性質を帯びる。自己は、それが物語られる限りにおいては、必ず、結末から逆算された形で選択・配列されるのであり、事実のままの記述ではありえない。三つ目の特徴は、他者への志向である。物語は本質的に他者さに向けられた限りであるということだ。物語の構造が結末を納得のいくものとする、この他者を納得させることによって、語られた自分をはじめて他者と自己との視点の際が乗り越えられる。他者に認められる語りであることが前提となる。またそれと同時に物語を語る権利を正当化させなければならないという必要も持つ。自己物語とは、これらの3つの特徴を持つ語りを指す。また、浅野(2000)は、「自己物語は物語得ないものを前提にし、かつそれを隠蔽するものである」と主張する。この場合の“物語りえなさ”とは、〈物語の宙吊り〉〈沈黙〉〈未決定なエピソード〉という現れ方がある。

どのような物語にも一貫性や自己完結を内側から阻む「穴」が空いている。自己物語の中に現れてくる内側にある変化へのきっかけ、変化の芽がここでいう語り得なさとなる。この語り得なさを隠蔽することによって初めて自己同一性が生み出されるのだ。

## (3) 物語化の注意点

また、物語化において、パラドックスが生じる。私は自分自身に対して「差異化」しなければならないと同時に「同一化」も必要とされるのだ。このようなパラドックスの逃れ方として「回心」がある。回心によって自分との断絶と連続とを同時に手に入れることができる。語り手は“死”によって過去から切り離され、他方で“再生”によって過去とつながっている。時に語り得なさいの穴は「沈黙」として現れる。これは語り手と内容に極端な距離をとれないからである。例えば、トラウマ的体験などは二つの視点が端的にショートして物語が消失してしまうからである。ここに、自己物語の限界点、物語化を強くも飲み

ているにもかかわらず語られ得ないということが起こる。

語りえなさを首尾よく語り得なさを隠蔽することによって他者への納得は達成される。聞き手である他者の視点を予想し、それを採り入れるながら語らなければならない。自己物語の始まりは「他者から我々に向けて語られる物語において」始まり、他者に浸透しているものである。つまり、他者こそが語り得ないものの露出を隠蔽する鍵となる。

社会において聞き手から受け入れやすい物語は、時として自分の体験と行為を自分でも気づかぬうちに型にはめてしまう物語「ドミナントストーリー」となりうることもある。

以上、今まで挙げてきた物語的アプローチの特長と注意点を踏まえて、今回の論文を書くにあたり事前に考察してみた。

例えば、自己の変わりやすさという観点では、関係論的自己論では関係が変われば自分が変わると考えられている。しかし、本当にそうだろうか。いつの間にかこれまでと同じ関係パターンを続けようとしている自分がいることに気付く。自己の変化を望むのであれば、本当に変えるためにはまず自己を変えなくてはならない。この場合、「自己の変化」とは自己物語の書き換えであると見ることであると見ることができる。物語の語りなおし、書き直しは、物語の語り得なさをあらわにし、活性化させる。そのことを踏まえ、筆者自身、この参与観察の記録を何度となく書き直した。一度は、「論文」という形を意識して、従属変数、独立変数といった、“社会学的な分析”にあてはめようとした事もある。

しかし、この論文は、ホワイトの記した参与観察や、浅野の提示する「自己物語」という観点において、数値の分析ではなく、いかにありのままに細かく記録し、報告するかということに注意をおいた。そのため、時に、論文として相応しくない文体や表現が現れるかもしれないが、現実を「あるがまま」に記録し、そこから読み解いていくという点に重点をあてた論文であるため、ご了承願いたい。

### 3 自我の枠組み

#### 3.1 自我とは

まず、この論文に今後何度となく繰り返されるであろう「自己」、そしてその土台として「自我」とを始めに説明しなければならない。そもそも、「自我」というのは何であるのか。曖昧であるこの概念に対して、ミードの「自己論」、そして、上記にも上がった浅野智明の別の文献「自我の社会学（2004）」から枠組みと概念を説明する。



### 3.1.1 ミードの「自己論」の枠組み

ミード(1934)は、「自己論」において以下のように説明をしている。

「自我はジェスチャー会話が人間の中に内面化された過程であり、個人の精神の中には社会的態度 (=他者の態度) が含まれている。人間は、自身の態度によって呼び起こされた他者の組織化された態度をジェスチャー (=相手に伝えようとする行動そのもの。言語・会話。他人の反応だけでなく、自身にも同じように反応する) によって取得し、この反応に反作用することで、社会の中の他者の態度を呼び起こす。

自我の発生には組織化が重要点であり、“役割を取得する”ところから始まる。まず、個人や相互に向けられた態度を単に組織化し、そこに社会的態度の組織化も加えて自我は構成される。つまり、社会集団の他の自我との明確な関係の中でのみ自我は存在しうるのである」(Mead 1934)

つまり、個人が自我を見出すには、他者を認識することのみ自分自身を実現できる。個人が他者の役割を取得することで、自らを自我として実現、取得するように刺激されている自分自身を見出すのである。解りやすく言うならば、他人の要求に対し、「受け入れる」or「断る」ことで自我を見出すのである。つまり、自分が選択と判断を出来るのは相手からのきっかけがある、という意味で自我は常に他者の経験を含んでいる。

また、自我は社会的行為、活動の過程で見出される。自我には二つの局面が存在する。それは大きく「I」と「Me」という局面に分けられる。以下に I と Me についての簡単な定義を記したい。

#### (1) I

「I」とは、他者の態度に対する有機体の反応である。記憶の中において現存し、過去の時下のスポークマンとして、そこに存在する。いわば”歴史上の人物”であり、反応はそれが起きたときでしか、人の経験の中に入ってこない不確実なものである。租借して言うならば、「私はこういう人間なんです」と人が自分を紹介する時、それは記憶の中にしか存在せず、現在進行としては人と交わることがない。反応を下す、自分が判断を下すという意味では“能動的”であるといえよう。自我における内面的な局面である。

#### (2) Me

「Me」とは、人が自らが想定する他者の態度の組織化された組み合わせである。他者の態度を取得、もしくは明確に想定する能力によって、自己意識を獲得する。もう少し租借して言うならば、周りの反応を見て自分の行動を決定しているのである。つまり、他者が自分に対して何を望んでいるのかという情報を取得し、現在進行形で他人と交わる。役割を取得してどう動くか、どちらかといえば“受身”であるといえよう。自我における対外的な局面である。

### (3)I と Me の関係

Me という対外的な自己を対自的な I が統括している。「me」は行為自体の中で与えられている義務に我々が応じる限り、ある種の「I」を要求するが、「I」は常に状況自体が要求するものとは異なった何かなのである。つまり I と me の間には常に区別があり異なったものなのである。その二つの区別する局面と共に進行する社会過程が「自我」である。

両者の相対的価値は状況に大きく依存している。I は人が自らを表現する方法として、自身に重要な感情を与え、me は個人に共同体の成員である（社会の一部である）という尊厳を与える。また、相互作用としては、例えば統御されない行為（=衝動的な行為）の場合、I は Me に対する支配的な要因でもあり、Me はある意味では「検察官」である。逆に、「社会統制」は I の表現に対抗する Me の表現であるといえよう。Me の構造が、個人が自己のその種の表現の機会を得るような構造である社会状況がもっとも満足する経験をもたらす。つまり、Me は社会関係により構成されているため、状況が衝動表現の開放となれば満足を得ることだ出来る。その満足は、社会過程の中の I の表現に付随する価値である。

また、社会との関係でいえば、Me は本質的な社会集団の成員であり、社会に属する価値でもあるがゆえ、自己犠牲を要求される。しかし、I は反応によって社会を再構築し、したがってその社会に所属する Me を再建するものである。個人は所属する共同体との相互関係にあり、自我はある明確な集団と統合したとき、最も容易に自己を表現できる。

しかし、思考または行動において個人（自我）がいかにか独創的であろうと、その精神はあくまで、社会生活過程（自分が所属する社会）のなかから創発してきたものである。

#### 3.1.2 浅野智彦-「自我の社会学」の枠組み

浅野（2004）は自我の社会学についてこの様に述べている。

「そもそも、「私」が何者であるのかということ、他者という鏡に自分の姿を映すことによってしか知ることができない。つまり、自己と他者との関係がまずあって、ついでその関係—私を見る他者のまなざし—が自分ん中に取り込まれた時にはじめて、自己は成立する。どのような関係がどのような過程をたどって自己の中に織り込まれていくのか、それを問うことが自我の社会学の課題といえる」

(中略)

「このような比較を通じて、人々が自明で自然だと思っているような自己のあり方が、実際には社会のあり方に応じて制度的につくり出されたものであることがわかる。

「私」とは、社会の中の無数の関係＝交通の、いわば結末点のようなものであるから、そこには、交通を円滑に進行させるために各社会へのルールにフィットする型へと「私」をはて込もうとする制度的な力がいつでも作用しているのである。このような力をあらためて問題化し、今あるような「私」でしかないことの行きがたさ、あるいはそもそも固定したアイデンティティを持つこと自体の不自由さに気づくだろう」(浅野 2004:108)

ここでの浅野の指摘する内容は、筆者本人の休学への理由や、他者との比較によっておこる一つまり、以下に述べられる考察—の核を得ている。社会とは人の人との交差点であるとするならば、どれほど我々は「自我」の変容を各交差点で経験しているのだろうか。

以下に示している記録は、上記で得た自我に対しての知識や概念として取得し軸とさせ、異文化との接触（過去1年8ヶ月に及ぶ海外経験を通じて出会った「人物」との接触、主に会話によって得られた異文化を参与観察）を、定性的社会調査法を元に抽出し、その結果を元に、私の「自己像」について相互的に組み合わせて分析し、考察したものである。

## 4 自我の変容の記録

### 4.1 それまでの私

#### 4.1.1. フィールドワーク以前の自己物語

では実際に物語的アプローチを自分に当てはめて実践してみた。

##### (1) .典型的な日本人であった私 「同一性志向」

中学校に入るまで、私は典型的な日本人であった。中流家庭に育ち、近所の子供達やクラスメイトと毎日外で遊ぶといった、どこにでもいる少女であった。小学校高学年ともなる

と一般的には、子供ながらに他人との距離を意識し始める年頃となるのだが、私自身も例外ではなく、何かにつけて「男子」「女子」などの区別した認識や、「みんながしている」などと、周りとの同調することを重視し、他の「みんな」と呼ばれる一般論から逸れることを嫌がった。女子同士で生まれる仲良しグループに所属し、まわりとの同調、そして同化することに安心を覚えた。決して、皆の前で何か反論を試みたり、変わった事をして目立とう、という意識はどこにもなく、いわゆる典型的な日本人的意識、つまり「みんなと一緒に」がいいという、同一性指向であり、また小学校や自分の所属するコミュニティも同一性思考が根強く残る地場で育った。

この背景により、私は物心着くまで、日本社会の「集団意識」(注1)という概念を知らず知らずのうちに身につけ、帰属感から心の安らかさを得るといった典型的な他者との関係を築いていたと考えられる。

## (2) 一つの転機……帰国子女学校における私

そんな私に一つ目の転機が訪れたのは、中学校入学であった。私は、中学校、高校と、私立の帰国子女学校に通うこととなったのだが、そこで得た経験や価値観は今後の人生に大きな変化を与えた。

まず、私が通った学校に対する説明であるが、生徒の8割が「帰国子女枠」(つまり、日本国籍ではあるが、外国で一定期間を過ごした後帰国したとされる学生)、そして残りが一般の試験を受けて入学を許可された「一般生枠」で構成されていた。私は、日本で生まれ、日本で育ったことしかない、かつ日本社会での立ち位置を持つての“常識”を大事にしてきた典型的な「一般生」であったが、私の周りの友人達は、外国で生まれた経験を持つもの、また物心つくまでの幼少期を外国で過ごした者が殆どであった。ある程度的人格が形成された後に外国(異文化)に触れる、という形ではなく、帰国子女の友人たちは、人格形成が外国で作られられたため、考える際の基準、そして物事の判断や、“常識”“当たり前”という意識がはなから違っていた。そのため、友人達との会話やコミュニケーションから、今までの私の物事の考え方や判断基準は、「日本」という小さな島国で培われた一つの物差しでしかなく、世界には、もっと違う見方や視点、基準が溢れている事を知った。何においても、互いの文化の背景からくる判断基準や、よし悪しの捕らえ方は何度も私を関心させ、そして視野を広げる大事なきっかけになっていった。

例えば、中学の頃、仲の良かったグループでのエピソードに典型的な考えの違いが現れた会話がある。私は、友達に何か自分の考えを述べようとした時に、気づけば「みんなそ

う言ってたよ。」「みんなやってるよ。」という言葉をつけ加えていた。しかし、その発言に対し、アメリカ帰りのA子はこう反論した。「みんな、って誰？人の名前でいうと誰？そして何人？“みんな”“みんな”って、みんなの基準はそんなに大事なの？」その言葉を聞いて、改めて私も“みんな”という言葉の意味を考えてみた。“みんな”という言葉は非常に曖昧である。厳密に考えると、実際は、自分の周りの2、3人の中での共通事項であったとしても、それは私にとって「みんな」であり、集団の中での“平均”であった。そして小学校までの私は、その平均に馴染む事こそが、「良い事」だと脳味噌の中に刷り込まれていたのだ。このことから、いかに自分が、周りを気にして生きてきた集団主義であったかが伺える。そんな私の意識に反し、周りの友人たちは、「個」を大事とし、「自分の意見」「自分のスタイル」を大事にしていた。校風も“個性を尊重する”と掲げていたため、制服もなくそれぞれ好きな服を着て、好きな鞆、好きなノートを使い、髪の毛やピアスの穴を開けるのも自由であった。外見的なものだけでなく、内面的なものも、外国の個人主義を尊重としたカリキュラムであり、授業内容も科目別にそれぞれの個人スキルにあったクラスであり、また好きな授業を選択できる時間もあった。中学生のうちから、英文での論文の書き方、レポートの出し方を学び、ワークショップという形の学び方、そして討論やディスカッションが頻繁に行われていた。ホームルームというクラスは一応存在はしていたが、同じメンバーで同じ授業を受ける一日というのではなく、それぞれ科目に応じてクラスを移動する中高生活であった。

授業だけでなく、日々の行動も個人を主張した「自由」を感じさせた。“自由とは、つまり自分で責任を持つことである。”という校長の言葉通り、校則もほぼなく、日本の法律を守ること、そして上靴を履くことのみであった。例えば、遠足や社会科見学は、現地集合、現地解散。また、修学旅行などで、船や飛行機に乗る際は、乗る前に点呼を取るのではなく、船の中（つまり、出発後）に点呼をとるようなシステムであった。つまり、すべての行動は自己責任であり、何か起こった時のリスクも自分で背負いなさい、という教育であったのだ。

そのような校風の学校に計6年間、特に多感な思春期を過ごした私は、性格や行動も段々と中学入学前とは違い、帰国子女の友人達に近い感覚に変化していった。そして、その変化が進むにつれて、私自身何か、開放されていくような満足を覚えた。この時、「集団主義」であった私の自己<I>は、個人主義である周りの友人や、学校というコミュニティそのものに入り、「個人主義」という<me>という社会集団の成員が生まれ、時と共に適応し

ていくことで、< I >自体もが、再構築され、個人主義である自我が再建されたものと考えられる。しかし、厳密に考えてみると、新しく生まれた Me の構造が、個人が自己< I >表現の機会を得るような構造である社会状況がもっとも満足する経験をもたらすとされるが、この時の私にとっては、I と me との関係内における軋轢や制約は感じられず、最も自然な形で I を表現することが出来た。とても満足を得ていたといっても過言ではない。この事を踏まえると、自分がこれまで「集団主義」である、と考えていた< I >こそが、小学校や幼き時に作られた後天的な自己であり、本来の私の自己は、元々「個人的主義」な性格を持ち合わせた自己を持っていたと考えられる。得てして、私は、水を得た魚、つまり、自らの居るべき場所、環境へと飛び込むことで、そこで本来の「自己」を見つけることが出来たのだ。また、この中学、高校時代の6年間を通じて、友人達から聞く、生い立ちの話や、外国での生活の体験談は、日本以外を知らなかった私の好奇心をかきたてた。この経験がきっかけとなり、後に休学を決意してまでも海外へ飛び出そうという行動の原動力となったのだ。

### (3) 二つ目の転機——「自分から能動的に動くこと」大学時代の私

大学に入学した私に、また新たな転機が訪れた。それは、ある先輩との出会いであった。その先輩は、学友会会長を務めながら、あちこちで学生団体をいう活動の集団を作っては、自らの思い描いた夢を一つずつ形にしている人物であった。

その先輩に出会うまでの私は、自己表現や、自らの意思表示などは、中学高校時代での「個性を尊重する」とされる社会において満足できる程に出来るようにはなっていたが、その意思表示や表現に付随する“行動”がまだ未熟なものであった。「やってみたい」という want は溢れていたが、いざ、do の段階になってみると、「自分に出来るはずがない」「失敗したらどうしよう」などというネガティブな意識が働き、中々実現に至ることが出来ていなかった。しかし、その先輩から、「やりたい。その気持ちがあれば、全部やってみればいい。失敗してもいい、自分から行動していくことが、実現への一歩だ。」という言葉を頂くことで、今までどこかで制圧していた自分の行動力を解放することとなった。

「自分がやりたいと思ったこと、それは自分の行動次第で実現できる。求めるものは、自分が動けば掴むことが出来る。」「そして自分が動けば動いた分だけフィードバックが返ってくる」新しく得た信念は、私の大学生活を一貫して貫く“軸”となった。つまり、今まで内面的な、漠然とした意識の中でだけ“自らの主張”そして自由を貫いてきた自己は、思想だけでなく“自らの主張を実現するための行動”といった外面的な部分でも個人主義

とした、確固たる＜I＞が確立されたのだ。

「やりたい事を片っ端から手を出すことが許されている」そんな恵まれた学生という環境を一瞬足りとも無駄にしたいはなかった。大学に入ってから、精力的にあらゆる活動をし続けた。サークル、学生活動、TV番組、フリーペーパー制作、新聞の記者、取材、四国原チャで一周旅行、18切符で西日本横断、など。自分がしたいと思ったことは全て行動し、表現をした。つまり、社会において行動という意味では、＜I＞への制圧を一切なくしたのだ。もちろん、対人関係やサークル内での役割、集団の中での＜me＞は調和を意識した形で存在はしていたが、行動という形での制約を受けることはなく、私自身は、私がやりたい事を満足がいくまで追求することが出来たのだ。また、＜I＞に対し、何かの制約がかかった時、例えば、失敗するケースもあったのだが、その制約に対して、今度は、「でない」ではなく、「どうすれば実現することができるようになるのか。その打開策を考えよう」という思考へとシフトしていた。しかし、この「大学生の時間」を貴重視するあまり、限られた時間やリミットを意識し、“焦り”の感覚で物事を行ってきたということは否めない。そして、このことは、あとで追記として付け足していただくのだが、この焦りに対して生じた疑問から、今後の私の学生生活にある一つの逸脱の転換点を決意させた。

#### (4) 休学

一見、全ての可能性に対して貪欲に挑戦しつづけたように見えた私であったが、一つ、心の中にずっと抱いてはいるものの、実現できない大きな夢があった。それは、「いつか世界一出来ることなら、一カ国ではなく、比較できるくらいの数十カ国を一をこの目で感じ、日本でしか育ったことがない自分の価値基準、つまり判断の物差しを、自らの経験でもって増やしたい」という夢であった。この夢の発端となったきっかけは、以前にも述べた中学・高校時代に触れた帰国子女たちからの影響であったことは間違いない。しかし、友人たちから得た影響は、“新しい価値観”というプラスの部分だけでなく、「日本しか知らない、視野の狭い井の中の蛙である自分」という変えられない事実を持った＜I＞に対するコンプレックスもあった。どれ程、周りから話を聞いても、意識を広げても、文献を読んだとしても、“百聞は一見にしかず”ということわざの通り、私にとっての日本以外の価値観は、実体験を伴わない＜他人からの意見＞という事実は変えることが出来なかった。その事実は、大学入学後に飛躍的に活動をし、経験値を増やせば増やすほど、＜実体験＞でない事実という壁は大きく私にのしかかってきた。「知りたい。見たい。感じたい。この体

で、この目で、この耳で。」目先の活動に忙殺されながらも、深い心の奥では、そういった感情を抱き、そして育て続けていた。

しかし、いくら学生という特権に守られ個人主義を貫いてきた私であっても、ずっと包括している“社会的な条件”つまり、学生だからこそ許される自由という枠を超えた部分での<me>の制約でもって、心の奥に芽生えている情動の実現を半ば諦めていた。その「学生だからこそ許される自由の枠を超えた部分」と称されるものは、つまり、人生においてのライフコースという大きな“常識”であり、学生は4年間である、という変えられない事実であった。< I >の思うがままに行動できるこの自由は、「学生」という守られた枠の中にあるからこそ実現できたものであり、時間枠という制限を超えることとなる、私の「世界一周への夢」は、到底不可能だと考えた。なぜなら、夢の実現のためには、膨大な時間とそして資金が必要だからである。

そんな情動を心の奥に抱えながら、20歳を向かえ、大学3回生の夏となった。秋からは就職活動が本格化するため、事前にスタートを切っておこうと考え、夏休みにインターンシップを二つ参加した。しかし同年秋、インターンシップ先から、早くも内々定を頂いたことがきっかけで私の心の奥にある情動が、変化していくこととなる。

まず、内定を得た事により、冷静に将来を仮定し検討し出した。このまま年齢を重ねていくとしたライフコースをシュミレートした。そして、自分の持ち抱えている「いつか世界中を旅したい」という夢が、どの年齢においても当てはまらない事に気づいたのだ。..でも、「いつか」って、いつだろう。夢を実現するには、日本社会においては、いつか仕事を辞めることになる。しかし、辞めることを前提に就職するのはおかしいのではないか。順序が逆だ。仕事だけでない。結婚をすれば、子供ができれば、当然身勝手に海外を長く渡り歩くことは難しくなる。結婚だけではない。親の介護も必要な年齢となる。つまり、年齢を重ねれば重ねるほど、自分の行動への制約は増していく、という事実気づいたのだった。「このまま年齢をとっていく。このままでいいのか?」「このまま、世間が辿る道を、何の疑いもなく流されていく事が果たして自分にとってよい事なのだろうか?」

改めて、今後の辿る将来の選択肢を紙に書き出し、それぞれの人生での重要とおけるであろう場面においてのリスクを書き出してみた。そして、むしろ今、学生の立場である今こそが、心に抱いた情動への実現のチャンスが一番ある時であり、今後へのリスクが少ないことだと割り出した。『今しなければ、絶対に後悔する。』

しかし、不安が大きくと決断を決めかね、晩秋、一度試しにカンボジアを一人旅するこ



とにした。そしてカンボジアにおいて、未知の世界と、自分の価値観の狭さを改めて感じ帰りの飛行機で、休学を決意した。『例え失敗したとしても、やらぬ後悔なら、挑戦したい。』

その後、一度決めたら実現に向けて邁進する性格であるため、本格的に実行に向けて奮闘を開始した。まず、周りを説得し、出発に向けての具体的な日付を決め、必要事項をリストアップ。そこから逆算し、3ヶ月で60万貯める事を目標に、昼は契約社員、夜はうどん屋夜勤として一日20時間程働き、資金を稼いだ。(途中、無茶をし過ぎて自律神経失調症となるが、目標と”必ず実現させたい”夢への「意地」と根性で乗り切り、目標達成させた。そして、2005年5月、ついに日本を出発する経緯となる。

参考までに、なぜ私という自己は、これほどまでに海外への思い(特に複数の外国)を濃く持つようになったのか。以前に、自分の価値判断基準へのコンプレックスというもの上げたが、その判断基準を増やすための打開策として編み出した海外への放浪へ理由を、的確に述べている文章を発見したので以下に記しておきたい。

浅野(2001)は自我の社会学においてこう述べている。

「自我とは何か。この問いを考えるためには、自分の住んでいるこの社会の中で「ノーマル」とされている自己のあり方をいったん相対化してみる必要がある。そのための最も有効な手だては、異なる地域、異なる時代、異なる文化の社会に注目して、そこでの自己のあり方と自分たちのそれとを比較してみることだ」(浅野 2001:109)

#### 4.1.2 フィールドワーク以前の「自我」への考察

以上、フィールドワーク以前の私の「自我」の変化を、時系列でもって表記した。改めて大枠としてこの時の<I>そして<me>を考察したい。

まず、文中にも何度となく出てきた、「集団主義」「個人主義」という言葉に対する説明を述べ、その基準を定義したい。北山忍・高木浩人・松本寿弥の記した「成功と失敗の起因：日本的自己の文化心理学」を参考にすると、<sup>(1)</sup>集団主義とは、相互独立的価値観、個人主義とは相互強調的自己観として捕らえることができる。

(1) 個人主義：相互独立的価値観—「自他の分離を強調する」自我を表しており、自己と他者の境界が明確に区分けされている。例を挙げるなら、多少誇張すれば、西欧型の代表であるアメリカ人は、(1) 自分を常に他者よりもユニークであると考え、(2) 自分

はネガティブな出来事によって傷つくことが少なく (3) 自尊感情を維持するためには、成功条件が重要と思込んでおり、(4) ポジティブな評価を伴う課題に固執することで、自己高揚を確実なものにしようとするのである。

(B) 集団主義：相互強調的自己観は、「自他の関係性を強調する」非西欧型の自我を現しており、自己と他者の境界が明確に区分けされておらず、相互に重なりあっている状態。例を挙げるなら、非西欧型の代表的である日本人は、(1) 自分は平均的な人間と考えており (2) ネガティブな出来事によって傷つきやすく (3) 自尊感情を維持するうえでは、成功条件よりも失敗条件のほうが重要と判断しており、(4) ネガティブな評価をもたらす課題に固執することを通じて、自己改善を図ろうとする。

以上の事を踏まえ、これまでの私の自己< I >と< me >の変化を時系列で挙げていくと以下ようになった。

#### 一、小学校まで…

先天的な部分では (A) であったかもしれない< I >は、周りの (B) という社会の中で、(B) に適応する形での< me >を生み、そして社会的な行動は、< me >でもって、I を監察することとなった。その無意識の違和感が、私を帰国子女学校への進学を志望させたものと考えられる。

#### 二、中学～高校時代…

周りの社会における人間的にも、学校という一つの社会においても、(B) という価値観が重視されている中で、最初は驚きながらも、それまで (A) という社会に適応するための< me >から、< I >は開放され、そして (B) の社会の中で、新たに (B) という< me >も形成される。< I >と< me >の一致により満足を得る。

しかし、(A) の行動の場面 (つまり (A- (4))) はまだ満たされていない。

#### 三、大学時代～休学…

社会的に完全に (A) とも、(B) ともいえない大学という社会ではあるが、選択の余地が与えられているため、(B) という価値観の社会を無意識のうちに選んでいた。そして、また大学生という特殊であり、かつ可能性への挑戦が許された立場において、(A) の行動、つまり (A- (4)) というポジティブな評価を伴う課題に固執することで、自己高揚を確

実なものにしようとしていた。しかし、就職活動において、また“みんな”と同じレールという(A)という価値観が生まれ、かつそこに当てはまらなければいけない<me>に対し、<I>は違和感を覚え、結果的に反発し、深く眠る<I>を開放するために休学を決意する。ここに、根本的に根付いている私自身の、集団意識に対しての疑問、そしてその枠を取り払いたいという<I>が見え隠れする。

## 4.2 異文化<他者>との接触

その後、一年8ヶ月に及び、参与観察と異文化への適応を繰り返してきた。しかし、ここには担当教授からの指導により、その中で一番影響を与えた一人の人物だけを取り上げ、その人物に対しての参与観察の模様と、そしてそこから私自身の<I>が受けた影響を記したい。

### 4.1.2 イスラム教徒アフメッドの参与観察

彼と出会ったのは、エジプトの宿だった。その頃、日本人宿（日本人ばかりが溜まり、長期滞在し、そこに日本人コミュニティを形成している宿）への違和感を覚えていた私は、現地人、そして日本人以外の外国人旅行者が出入りする宿に滞在していた。決して綺麗とはいえない宿であった。賃金も最低レベルの一日10エジプトポンド(=200円)であり、部屋はもちろん共同、木でつくられたベットは、底の部分が縄でできており、時に足が抜けたりする。そして毛布は一度も干したことがないであろうもので、そのまま直に被ると、痒くてたまらず、次の日は、ダニに何箇所も噛まれる気配がした。しかし、そのような安宿には慣れていたので、自分のシュラフを持って毛布の中に入り込んで寝ていた。しかし、1月という真冬の時期は、「暑い国エジプト」といっても、とても寒いものであった。なぜなら、“暖房”という概念がないからだ。夏は45度を超える暑さに見舞われるカイロだが、砂漠地方であるため、温暖の差が激しく、冬はとても寒い。外にいと、吐いた息が白くなるほどだ。おそらく10℃以下にはなっているに違いない。しかし、日本と違う点は、暖房という概念がないため、どんなに寒かろうと、ストーブもなく、しかもシャワーは水である。寒い日に、水シャワー（もちろん湯船なんてものはない）。軽く拷問である。しかし、これも「背に腹はかえられぬ」状態であれば慣れるものであり、爪先から序じよに冷水を浴びていくことで、心臓麻痺は防ぐことが出来た。しかし、余りの寒さに、シャワーの後は寒くて凍えてしまうものだった。

泊まっていた宿には共有スペースのようなベランダがあった。ベランダといっても、夕

タミ 2 畳分くらいではあるが、ベランダから、埃まみれの茶色いカイロの下町が見えた。そこで、私はシャワー上がりに自分のバスタオルと、洗濯物を干していた時にアフメットと会った。彼はぼんやり外を眺めてタバコを吸っていた。イスラムにおいてタバコは禁止なのだが、このエジプトにおいては結構な人数が、こっそり吸っていた。寒くて寒くて中に入ろう（窓が割れているので、結局中も寒いのだが）とした時に、「コーヒーいる？」と薦めてくれたのが彼だった。「ありがとう。」快くコーヒーを頂き、私は彼と会話することとなった。「どこから？」「日本。」「ジャパニーズか、いいなあ、budest だろ？」「まあ、一応。仏教徒の人は少ないけどね。そちらはどこから？エジプト？」「いや、パレスチナだけどね、厳密には。しかし、エジプトで生まれたので、エジプト人だよ」「パレスチナ？イスラエルから出れたの？」「イスラエルからエジプトにはね。親の世代で逃げてきた。ただ、もう戻れないな。自国に帰りたくても、父も母も、この国で生きていくしかない。」「エジプトで何をしているの？家族は？」「出稼ぎさ。カイロ（首都）に働きにきているんだ。両親は、田舎の町に暮らしているけれど、お金が必要で。お金もないので、今は友人の家に居候できないか交渉中なのだが、ここの宿のオーナーが父の古い知り合いで、今はおいてもらっているのさ。自分のベットとかはないけれどもね。」そんな事を初日に話した。

それから同じ宿に泊まっているので幾度となく顔を合わせる事となったのだが、一番仲良くなったきっかけは、彼が私と同室のロシア人の女の子のことについての相談を受けた時だった。そのロシア人の彼女と私は隣のベットであり、彼女も私も長く滞在しているので当然仲良くなった。その彼女、そして他の部屋のドイツ人の子などを含め、ベランダで何度か話したこともあった。そして、何となく、そのロシア人の子と、アフメットがお互い好意を抱いていることは感じていた。しかし、ムスリムの国（イスラム教の国）では、結婚前の男女交際は基本タブーである。「アラーの教え、コーラン（聖典）による「結婚前の男女の交際は禁止。付き合う時は結婚を前提とし、お互いの家族に紹介しなければならない。親戚にも紹介し同意を得なければならない。」ということらしい。そして、結婚を前提となると、という話にしても、ムスリム（イスラム教の信者）はムスリムとしか結婚することは許されていない。特に女性の場合は、ムスリム以外の男性と付き合うことは許されず、男性の場合は、結婚の際、相手の女性をムスリムに改教させるのが原則であるとのことだ。つまり、お互い好意を持っていようとも、日本や他の国の人間のように、簡単に「付き合う」という行動は出来ない。一生に一度、結婚を前提に付き合うことが許される、という位に厳格な決まりがあるのだという。また、「交際以前に、二人きりで公道を歩く、

なんていうのは、タブーなんだ。独身の男女が、例えエジプト人同士、イスラム教徒同士であっても、二人だけで歩いていると風紀警察に捕まって逮捕される。だから、家族に交際が認められた（つまり結婚の約束をした）男女であっても、結婚するまでは、どちらかの家族、妹や弟、兄、もしくは身近な友人を一人以上連れて（つまり、3人以上）で外出することが義務つけられているんだ。」という。なるほど、アフメットも、ロシア人の彼女とカフェに行くときでさえ、誰か他の友人を誘って、何人かで連れ立って行っていたのは理由があったのだ。

そして、まず、イスラム人以外の女性（つまり、黒いベールをつけていない女性）と連れ立って歩くと、非常に周りから偏見や軽蔑の眼差しで見られることを苦にしていた。それだけで、変な目で見られるだけでなく、相手の女性が、「売女」などと、現地語で罵られる場合もあるらしい。一緒に歩いているだけなのに、である。日本であるならば、例えば学校で同じクラスの異性と偶然道でばったり会ったり、帰り道が一緒になること位は日常茶飯事であり、話をしながら一緒に歩いたりすることも多々ある。しかし、この宗教下においては、それは一切のタブーであり、犯罪となりうるのだ。

相談を受けてから数週間後、その彼女が自国へ帰ることとなった。アフメッドは「空港まで見送りにいきたいから一緒にきてくれないか？」と頼むので、同行することにした。そのままでは、帰り道が、私と彼の1対1の男女となり犯罪となるため、同じ宿の仲の良かったドイツ人の男性と4人で空港に向かうことにした。空港に向かうタクシーの中で、彼らは手を繋いでいたのだが、それに気がついたタクシー運転手に何か大きな声で怒鳴られた。後から聞くと、「公共の場で、アラームの教えに反するような行為をするなんて、お前は本当にイスラム教徒なのか！」と怒られたらしい。

また、空港に着いてからも、中に入るのに一苦労した。私、ドイツ人の男性、ロシア人の女性は、すんなり入れたのだが、アフメッドだけが、入り口で警備員に止められたのだ。理由は、外見が「アラブ人（＝エジプト人）」であるから、外国人が多く利用する国際空港に来るのはおかしい、つまり、何か悪巧みをしているのではないか、という尋問を受けたからだ。実際、エジプト人の中に、外国人を騙したり、空港で悪事を働く人間がいるから、という理由であるが、国籍によって、自由に空港も入ることが出来ない現実を目の当たりにした。その件においては、ドイツ人の男性が、「彼は自分の友人であり、同じ友人を見送りに来たのだ」と説明することによって、やっと警備員が入れてくれたのだ。私の時は、同じ警備員であったにも関わらず、「何人だ？」「ジャパニーズだ」と言うだけで、すんな

り通過することが可能であったにも関わらず、国籍によってこれほど差別があるのだ。また、彼からは他にも、「行動の不自由さ」についての話を沢山聞いた。代表的なもので言えば、彼は例え本人が自国を好んでなくても、自分の国から自由に出れないということ。この場合、彼はエジプトに来て長いので、エジプト人という公の立場を使っているのだが、例えエジプト人であっても、パスポートを取得するのは至難の業である。よほどのお金を積まない限り、パスポートを取得することは出来ない。そして、取得することが出来ても、まず、他国でのビザがおりない。アメリカやイスラエルなどからは「イスラムの国出身」というだけで拒否されるのは解るが、今や、別の国であっても、イスラム圏出身となると入国を許可してもらうことがほとんど出来ない。同じ中東のイスラム圏であると、まだ行き来は可能ではあるが、それ以外の国へはよほど大きなバックアップか、もしくは資金がないと、ほぼ入国は不可能だといえるとのことだ。

また、公には「パレスチナ出身のエジプト人」というカテゴリで生きているアフメッドには、ある一定の年齢で、徴兵制度があり、有無を言わずに強制的に入隊が決定している。そして、現段階での兵役は、ほぼイスラエルとの攻防であるため、その兵役の期間に死亡する確率は非常に高い。頻繁に攻撃が繰り返されている現在では、兵役に入る＝死に行く、と行って過言ではないであろう。本人は「まだ死にたくない。母や父、家族がいる。これからどうやって生きて行くのか」と考え、入隊を嫌がって何とかescapeを真剣に考えているが、入隊を拒否することは、イコール犯罪となり、投獄される（韓国も基本的には同じである）。犯罪になることを前提に、他の国に行き、その犯罪の時効となる6年間（?年数の記憶は曖昧である）雲隠れする、という方法が唯一であるが（お金持ちはその方法を取るらしい）しかし、逃げる資金もないうえに、パスポートを取得することが至難の業であるため、現実的とはいえない。それでも彼は、現在、昼も夜も働いてお金作ろうとしているのだが、今のままでは不可能なままその指定年齢を迎えるのだと言う。

私は、彼がある日、ふと漏らした「Life is hard」と言った言葉が忘れられない。

毎朝、朝5時にアザーン（イスラムのお経）が、モスクから大音量で響き渡る。その音と同時に、アフメッドは毎朝、メッカの方向を向いてお祈りをする。朝5時だけではない。イスラム教徒は、朝方、正午前、昼、午後、夕方、日没、と一日5回の祈りが義務である。食事はお酒や豚は禁止され、年に一度は断食の月があり、日中は水も飲めない。また、イスラム教徒の女性は、真夏であろうと髪と顔にカバー被らないと一生外も歩けない。日本で当たり前のような、Tシャツも、ノースリーブも、ひざ丈スカートは一生着ることが出

来ない。そういった、既知のイスラム教徒たちの日常生活における作法や義務といった制限だけでなく、実際アフメットのケースのような、思想面、特に恋愛などにおける不自由、徴兵制などを考えると、日本人である私達はいかに日常の行動が自由かということがわかる。

また、思想面においてであるが、エジプト人と世間話をしていると、知らないうちに“悪いのはすべてアメリカ”、となることが度々ある。パレスチナ問題はもちろん、世界の地域紛争からしては日本の景気が悪いのも、すべてアメリカが仕組んだこと、となぜか結論づけている。日本の景気が悪いのは日本人のせいだと思うし今はアメリカ抜きでは経済が成り立たないよ、などと言おうものなら、やはりそれもアメリカの陰謀であると断言される。アメリカ嫌いは何もエジプトだけでなく、中東諸国に共通した国民感情のようだ。政治的にはアメリカと深い結びつきのある国がほとんどだが、一般庶民の間ではイラクのクウェート侵攻やルクソールのテロ事件、さらには昨年アメリカ同時多発テロも、背後にはアメリカの陰謀があったと今でも真顔で語られます。確かに、彼らがアメリカを嫌う理由は解らなくもない。なぜなら、アメリカの意思によって、彼ら（中東全域）の生活が左右されてしまうからだ。例えば、シリアを旅していた時、私はコンタクトを壊した。コンタクト、がシリアで買えるか不安ではあったが、そんな心配は現地の人にとっては失礼な話であり、現地で暮らしている人が居る限り、一応の生活のライフラインはどここの国も変わりなく得ることは出来る。コンタクトもそうである。コンタクトが手に入らない、という偏見は、シリアで目が悪い人は眼鏡以外つけるな、と言っているようなものである。大きめの眼鏡屋に行くと、大抵手に入るものだ。その日も、私は「ACUVUE」と表記された看板のある眼鏡屋に行った。なぜなら、アキュビューは全世界共通で市販されているものであり一番安心が出来ると思ったからだ。しかし、店員曰く、「アキュビューは買えない」という。「なぜ？店の前に看板が出ているじゃないか」というと、「我々だって、売りたいし、売り上げにも貢献していた商品だったのに、今は売れないのだ。」という。よくよく話を聞いてみると、シリアはイラクの隣国であるが故、「テロ支援国家」というレッテルを貼られ、そのために数ヶ月前からシリアに対して、アメリカからの貿易はストップされてしまったのだ、という。つまり、アメリカ商品は、シリアには輸出しない、とアメリカに一方的に切られてしまったがために、コンタクトやアメリカのメーカーの商品、（食品・水・服・電化製品全てにおいて）は一切手に入らなくなってしまったとのことだ。アメリカ商品を主に扱っていた業者や商店は当然、倒産に追い込まれる。「何でも、アメリ

カの言いなりだ。アメリカは自分達が一番偉いと思っている。アメリカのせいで、我々の生活は殺される。アメリカが、偏見を持って我々を見ること、そしてそれを国連や公の場で、偏見をもった発言をすることで、我々がどれほどダメージを受けているか。誰も観光になんて来てくれやしない。観光で成り立ってた地域の住民はどうなるんだ。いったい、奴らが我々の何をしているというのか。アメリカの発言のせいで、我々は世界から孤立してしまった。挙句の果てに、貿易も止められた。全てはアメリカのせいだ。」

以下に、この時に記した日記（パレスチナA氏の話を含め、それまでの経験を見て感じた全ての事を踏まえて）を、そのまま、まるごと記載したい。なぜなら、この時の感情や、情景が全てこの文章に投影されているからだ。この時書いた文章はあくまでも日記であり、論文ではない。しかし、私はこの時、そして1年8ヶ月に渡る私の異文化（つまり、＜他社＞との接触において、＜自己＞とくに、自己の可能性、への大きな影響を受けた体験を表し、表現するには、以下、二つの日記を取り上げるのが一番最適だと判断した。よって、文体は変えず、その時、その状況で書いたありのままの私が文字となって現れている。時に、論文としての形にはふさわしくない部分もあるかもしれないが、ここはあえて、W・F・ホワイトが「ストリート・コーナー・ソサエティ」で貫いたと同じように、まるごと手を加えず、そのままの表現（改行も含め）を記載することを決断した。

以下、筆者（2006）自身の日記<sup>12</sup>からの引用である。

「2006年、2月某日。一私は知らなかった。実際にその国で生きてきた人の口から実際聞くまでは何も知らなかったのだ。日本で見たTVや教科書の知識でしかなく、事の現実を全然見てなかった。過去に出会った数々の生の言葉が今、私の心に「事実」として突き刺さる。ラオスで出会った僧侶の男の子の言葉、「教育を受けるためには出家するしかなかった」。タイの売春婦の子の言葉、「だって大学にいきたいから。」ベトナムで出来た友達に聞いた言葉、ベトナムで生きるという現実。「ベトナムでは金が全てになってしまう社会がある」カンボジアでお会い出来たJICAで働くカンボジア人の方の言葉。「カンボジアへの援助が与える現実の影響」。カンボジア社会を研究する院生の方の言葉。「人間学と開発とのベクトルの差異」。

「俺達の国は今でもユーゴスラビアだ」と声を荒げて言ったセルビア人の友達。「セルビア人の子供はあっちいけよ」と吐いたハンガリーの少年。「あいつらが俺らを支配した。今



でもセルビアが憎い」と言ったマケドニア人の言葉。「私達は元は一つの国だったのに・・・」と嘆いたマケドニアの宿の奥さん。「国籍で人は信用も仕事も判断されるんだよ、」と呟いたルーマニア人のマフィア。「日本で、最高の国だよ」と憧れて言ったブルガリア人の友達。オーストリアで会ったスロベニア人のコミュニティ。ボスニアで会ったご夫婦、「ボスニア人地区とセルビア人地区は全然違うでしょう?」。トルコの商売人「日本語話せるといっただけで無視される。日本語なんて勉強しなければ良かった。後悔してる」。シリア砂漠にて「あいつの家はお金があったから高校や大学に行けたんだ。羨ましいとは思いますが、

でも俺の家はこのラクダと馬とロバが財産として残してくれたからこうして仕事することができる。」シリア人アーティストの言葉、「シリアにだってたくさん才能は潜んでるんですよ。」ヨルダンの遺跡の少女の言葉、「え?だって、これが仕事だから」シリアのバスで会ったパレスチナ人の言葉、「ほら、そこの家の群も、パレスチナ難民キャンプ。もとはパレスチナにいたんだけど・・・」

イスラエル兵がパレスチナ人に対して乱暴に扱う姿。エルサレムの地で嘆きの壁に祈りながら泣いていたユダヤ人。エジプトのある町で、散々親切にしてくれて、こっちがミニバスに乗っても走ってずっと付いてきた子供が最後に言った言葉。「M o n e y .」

今、私が手にしている「自由」や「可能性」が、自分だけの力では手に出来なかったいかに感謝すべきことなのかを思い、それと同時に、自分の力とは無関係に「可能性」を手に入れない人達が無数にいることを知る。「そんなん、変えようと思えば誰だって何だって出来るよ。」って、・・・本当にそう思う?旅に出たばかりの時の私なら、そういう事、簡単に口にしてしまったかもしれない。だけど、今なら思う。それは、恵まれた国の人間の意見だ。先進国の視点からのエゴでしかない」

#### 4-2-2 異文化<他者>から受けた「自己」への考察にかえて

まず、このアフメッドの現実、また上記の日記に記した通り、各国で生きる人々を参与観察したことにより、どのように自分が考えたかを記していきたい。まず、全過程において共通するある感情<sup>4)</sup>に対してを記した日記がある。この日記が、これまでの多国における参与観察の考察を包括していると考えられる為、以下に記しておきたい。

「2006年 1月某日

自分の国から自由に他の国を旅することが出来る、それってどんなに恵まれた自由なのか。そして、そういう事が出来る国、人種、人間はいったい世界の総人口の何%にしか満たないのかを。その何%以外のこの世に生を受けた人間は、自身の選択余地がないにも等しいほど、人生の「可能性」は生まれた国に依存する。環境や、家族や宗教や、教育や、医療や、身を取りまくすべての環境、生まれたときから当たり前のように存在していた自分では何の疑問もなく今まで過ごしてきた社会が、実は「選択余地なく”生命国”」に依存していたことだと気づいた。

例えば、イラクだってそう。あの国で生まれた赤ん坊が戦争を求めていると思う？あの国に住む子供は親や家族を空爆で失っても、戦争を求めていると思う？別に、あの国に住む人間全てがアメリカとの対戦を望んで生まれた訳じゃない。イスラエルだってそう。パレスチナだってそう。イスラエル人も、パレスチナ人も、互いを傷つけあうために生まれてきたんじゃない。ただ、生まれた国が、そういう環境だった。そういう状態だった。そういう教育だった。そういう宗教だった。イスラムの国の人々だって、今の世の中、ムスリムというだけでテロ組織支持国だ、とか、原理主義包囲だ、とか、そういうイメージで見られがちで、その国に生まれた人は個人の意思がどうこうの選択以前に、”イスラム国籍”というだけで入国拒否される国がたくさんあるらしい。もしくは、巨額の財産証明がないと承諾されないか、どちらか。

私は、旅に出てから自分の「日本人国籍」がいかに世界でpowerを持っているかを知りすぎて驚いた。空港チェックや、イミグレの時はもちろん、バス移動中に突然検問にかかり、乗客全員下ろされ、麻薬犬とともに荷物チェックされたときも、私が「日本人」だと解るとスルーだったり、国境を越えるときも、同じバス内の現地人が、「あなた日本人？これ、ちょっとの間だけでいいからそこに置かしてくれない？」と国境通過時だけ、荷物（あやしい）を私の席の下に入れようとしたりした。とにかく”日本国籍”は特殊な位、有利だ。特別扱いされている人種、ともいえるくらい日本人は有利だ。だけど、それは私が「良い人間」だからという訳じゃない。人の良し悪しや言動に無関係で、ただ、「日本で生まれた」から。そして、「円が強い」からである。アジア諸国で中年日本人男性が買春をし、幼女を金で買い、ドラックをし放題な現実においても、そんな人ですら時にVIP扱いをされる。ただ、「日本人」というだけで。恵まれている、日本人というだけで。

じゃあ逆は？それと同じように実例で存在してしまう。イラクで生まれた人は？イン

ドで生まれた人は？ベトナムで生まれた人は？そしてイスラム国で生まれた人は？

痛かった。国際間の表に見える問題の配下に、それを含有するもっと大きな問題が存在している。今まで出会ったあの彼女、さっき話した彼には可能性がない。国籍という判断だけでその可能性がないのだ。

"it s out of my hands."

どうしようも出来ないこと。国籍なんて自分達では選べなかったこと。何人かも、何系かも、何人種なのかもただ、運命のままに従っただけで選べなかったこと」(2006)

以上の事を踏まえ、私の自己< I >と< me >の変化を挙げていくと以下のようになる。それまで、私は、日本社会における“みんな”と同じレールという集団意識に対する疑問、そこに当てはまらなければいけない< me >に対し、< I >は違和感を覚えその枠を取り払いたいと考えていた。そして、「一つの価値観だけではなく、もっと多様な価値観を知り、< I >を開放したい、という認識で日本を出発した。しかし、世界の現実を知るにあたり、「本当に日本は制限された国なのだろうか？」という疑問が沸いてきた。確かに、日本人は、集団主義であり、行動や思想にある一定の枠が存在する。しかし、その思想や、自己や自我を形成する「状況」をまだ、厳密な意味で選択できる立場にいるのだ。世界には、思想や行動以前の、日常の立ち位置、信仰すべてにおいて、生まれた時から選択の余地さえない人間が沢山いるのである。その人間たちは、Iの変容どころか、生まれた時の< I >の時点で、すでに決まった選択肢しか出来ないのである。(本人が希望しないものとしても)

Copper,C.R.&Denner,J(1998)は以下のように述べている。

「文化とは、それぞれの集団に所属するメンバーたちの共有する価値 (Value) が、個人レベルにおける認知、情動、社会的な行動様式 (functioning) に大きな影響を及ぼす」との前提から出発する」(Copper,C.R.&Denner,J 1998)

つまり、個人レベルでの認知、情動、社会的な行動が、生まれた時から決まっており、本人がどう望んでも変更の可能性すらない人たちが世界の大半であるということである。私が、< I >の制限、という違和感を持っていたが、その違和感以前の問題であることが解った。我々が、< I >や< me >を形成する[状況]に対し、自らの意思で変容を遂げるこ

とが可能である反面、生まれつき、＜me＞が指定され、それ以外の me そして、＜I＞以外になる事（決められた I 以外を、表に出すこと）が許されない。

逆にいうならば、我々の＜me＞や＜I＞は、おかれた状況、つまり日本人が自ら選択し、周りと同化することを選んだ故の制限である。言い換えれば、「選択の可能性があった」自我だといえる。この章の結論として、まずもって私が出国以前に持ち抱いていた＜I＞への違和感「日本人の行動の制限の不自由さ」は、世界相対的にみると、偏った見方であったこと。そして、「実は、日本人は自由であった」という事実気づかされたのだった。

### 4-3 帰国後の再適応

#### 4-3-1 帰国後の記録

日本に帰国して、約1年が経とうとしている。私は、日本という国に再適応を強いられた。あえて言うならば、帰国直後から、就職活動をしなければならなかったため、日本の国、というよりも、もっとシビアな日本社会、つまり＜ビジネス社会＞への適応を強いられたのだ。

——「日本人だからこそ出来る可能性」

帰国後の就職活動での面接の場面で「あなたがその旅経験で学んだことはなんですか?」と聞かれた際である。その問いに、はじめのうちは、素直に答えていた。「日本人の選択肢の可能性」だと。しかし、日を重ねるにつれて、その意見が、この資本主義の社会人として通用しない意見でしかない、と気付かされた。帰国当初は、「私はこれでいい」と確固たる＜I＞つまり、自我を貫こうとした。しかし、苦い挫折を味わうこととなった。日本のビジネス社会とは、想像以上に、＜集合主義＞社会であったからだ。

そして散々もがいた挙句、再適応を自分に許した。この国ではマジョリティが優位とされ、マイノリティは生きていけない思想がはこびっている。そして、その逆風に向かうことは、社会的孤立を意味する。私は日本人であった。少なくとも、日本人国籍である。そして、この国で生きていこうと考えている。この集合主義社会で生きていくためには、適応することが必須条件であった。適応することが、身を守ることだった。断食の国では断食をする。合理的な国では合理的になる。せざるをえない。疑問を持つ事は、非常にしんどい。適応できないと、自分が潰れる。そしていつしか常識に染まった性もない人間になっている。片隅に、こんなバカバカしくなった自分を見下す自分もいる。だけど気付かな

いようにする。疑問を持つ事は、<me>と<I>の間に大きな軋轢を生み、自我という過程で多に苦勞をする。適応できないと、自分が潰れてしまいそうになる。そして、やはり社会に認められたいという<me>が働いていた。

スーツがよれないように頻繁に「クリーニング」なるものに出すことに必死になり、深夜もやってるクリーニングを探した。お金を費やした。一回のスーツを洗う金は、ベトナムの友達の月収を一瞬にして上回った。一回のタクシー代は、何百人もの人を救える金であった。だが、私は2000円も払った。面接に遅れることは、人生の終わりだと考えた。

「なんて無駄遣いだ。」ばかばかしいと、思いそうになる意識を、必死に戻す。そして、適応するために、意図的に答えを変えた。口先だけの答えを言うようになった。

気が付けば、蛇口から“お湯”が出る、という奇跡的な事に感謝できない。気が付けば、バケツで服を洗う事を忘れていた。気がつけば、電気が普通につく家に住んでいる。気が付けば、ローソクもバケツも捨てていた。そして、気づいたら、俗的な世界にどっぷりとまた嵌っていた。世間体を気にして一応おしやれをするようになる。なぜなら、この日本社会が、見た目で判断される世の中だから。給料に敏感になった、なぜなら、お金がないと出来ない事が多すぎる世の中だから肩書きにも敏感になった。なぜなら、上下関係を意識するのがルールな世界だからである。電車が5分遅れてることに腹を立てる。

なぜなら、1分でも遅刻したら「人間として失格」と見下される世の中だからである。

これまで世界で見てきた現実や、重要だと思える事柄と比較すると、とても重要だとは思えない内容で日々悩むようになった。その理由は、外見感覚も、時間間隔も、逸脱すると、この日本社会、つまり集合主義社会では、「人間として価値なし」という烙印が押されるためであり、そこで孤立することが怖い、という<me>が<I>を制限させたからだ。

偏差値社会な世の中。数学の数式を解くことに必死になり、一点の差で人生が決まる。その「教育」は、非常に狭い世界の教育だ、と誰かが言ったら世の中が壊れる。なぜならそれが、この集団主義社会で求められる適正であり、この国の常識であるからだ。

以下に、筆者（2007）が帰国して半年後に綴った日記<sup>4</sup>を記した。

「どちらかにしかなれない。“日本の常識”から逸脱すれば、社会的にも認められない。周りから人が離れていくのが怖い。かといって、世界の常識を忘れてしまえば、「君は変わったね」「大事な事を忘れたんだ」と見放される。罪悪感と、冷たい心を持つ自分に苦しむ。どちらかにしかなれないのか。」（2007）

#### 4-3-2 帰国後の再適応への考察

結果的に、私は、再適応を選んだ。それは自分を守る術であり、これから、自らが生きていく唯一の手段であった。「日本人だからこそ出来る可能性」その日本人として生まれてきた私は、世界の多くの人間よりも恵まれている。それは間違いではない。だからこそ、その恵まれた環境を与えてくれている“日本国籍”に同化することは、一つの条件であると考えた。これほどの恩恵を受ける、我々の可能性は、私たちの集団主義意識の中で生まれてきたものであったからだ。

つまり、上記の段階であげた、< I >や< me >の変容が可能な[状況]を選ぶことが出来る可能性という、我々の特権は、その[状況]の大前提である、集団主義社会に適応し、その社会においての<me>を形成し、振舞うことが前提とされているのだ。つまり、< I >や< me >を形成する[状況]の選択肢は、大きな日本文化圏への大前提である<me>としての適応・対応の上で成り立つことが出来るのだ。

これまでの事で何かひとつ、自分で発見した事実を述べるとしたら、私はこの発見を述べておきたい。

## 5 考察

以上の3つの時系列から、それぞれで挙げた考察を統括してみると、以下のような事が挙げられた。私は、海外に出て、異文化に触れるまでの間、集合主義（つまり、「自他の関係性を強調する」自我であり、自己と他者の境界が明確に区分けされておらず、相互に重なりあっている状態）という日本の価値観に疑問を持ち、かつそこに当てはまらなければいけない<me>に対し、< I >は違和感を覚え、異文化の価値観、より幅広い価値観を得ることによって、確固たる個人主義（つまり「自他の分離を強調する」自我を表しており、自己と他者の境界が明確に区分けされている状態）を確立させようとした。なぜならば、その個人主義の確立こそが、根本的に根付いている私自身の、集団意識に対しての疑問、そしてその枠を取り払いたいと思っていた。日本社会はとても閉鎖的なものであり、考えや行動においても、自由がなく、制限された世の中であるから、その制限から< I >を開放したいと考えていたからからだ。

しかし、実際に、異文化に触れることによって、「**実は、日本人は恵まれた可能性を持つ人種であった**」という**事実**に気づかされたのだった。まずもって私が出国以前に持ち抱

いていた< I >への違和感「日本人の行動の制限の不自由さ」は、次元の違った認識違いであったのだ。世界相対的にみると、「日本人は制限されている」という考えは、偏った見方であったこと。そして日本人こそを持つものはない、という事実を知ったのだ。

その後、帰国して私は日本社会（主に、ビジネス社会）に再適応を強いられることになる。なぜならば、上記に述べていた< I >や< me >を形成する[状況]の選択肢は、大きな日本文化圏への大前提である< me >としての適応・対応の上で成り立つことだと解ったからである。その大前提への適応なしでは、可能性や選択肢を得ることは出来ず、日本人の可能性は、日本社会という一種の集合主義の思想の中で守られているものであったのだ。

## 6 結論

以上の考察を踏まえた上で、日本社会においての< I >自己 はどのような形で関わるのが理想であるのか。一連の結果と考察から導き出された結論として、私に必要なのは「I と Me のバランス」と社会においての変容の中における軸の必要性である。I が優位でも Me が優位でも、どちらがどちらの行動を示唆するなどに偏るのではなく、いかにして、他者や社会の期待を受け入れて自己の意思と結びつけ行動に出すか。そして、その求められる行動は、その社会それぞれにおいて違う。しかし、その変容していく< I >や< me >においても、一定のポリシー、自我としての軸を確固としていきたいと考える。

浅野（2001）は以下の様に記している。

「このような力をあらためて問題化し、今あるような「私」でしかないことの行きがたさ、あるいはそもそも固定したアイデンティティを持つこと自体の不自由さに気づくだろう」（浅野 2001:110）

確かに固定したアイデンティティを持つことは、とても難しいことであり、それが故に各適応場面において苦勞を強いられることとなる。しかし、それであっても私はこれまでの特異な経験から、変容する自我の中にあっても変えたくはない「軸」を見出すことが出来た。北山忍・宮本百合（2000）をヒント以下に記してみたい。

日本社会において、最も、重要視されるコミュニケーションは、発話の裏にある本音の読み取りである。そして、意思決定においては全員の参加と合意の追及が、重視され、心理傾向は人と人との関係において幸福感を得やすい。一方、他国、特にアメリカに代表さ

れるような個人を重視する社会では、コミュニケーションにおいては発話の意味内容が最も重視され、意思決定においては積極的発言・意見の競合、そして個人志向の中で幸福感を得やすいという心理傾向にある。このヒントを元に、特にこの報告で述べたい事に、日本社会（特にビジネス社会）においての集団主義において、意思決定の「消極性」つまり、自分から何かをしようという気持ちのなさが伺えた。意思決定の「消極性」は時に、全員の参加と合意の追及の中では必要なことであるかもしれない。しかし、何事においても、「仕方ない」という後ろ向きな気持ちでは、日本人としての可能性を無駄にしているに違いない。自らが、日本人であり、日本人の可能性を知ったからこそ、今私にしなければならぬ行動とは、「目的」を持つことである。

自分たちの可能性、その選択肢の広さ。世界的な相対で捉えたとしても、比較的恵まれているにも関わらず、その恩恵を無駄に気づいてない人間が多い。日本人は、自らの「選択の可能性」に対し、それを自覚すること。そして、その可能性を自覚した上で、「目標」を持つこと、そしてそれに対して、自らが行動を開始し、積極的に近づこうとすることが必要だと考えた。もちろん、その「目標」が実現するためには、日本文化圏への大前提である<me>としての適応・対応の上で成り立つことである。しかし、自分がおかれる[状況]に対しては我々は日本人は、その選択をする可能性が許された少ない民族なのだ。

社会に適応すること。それは、どこかの組織で生きていく上では欠かせないことである。しかし、適応することばかりに意識をとられ、その流れのまま、周りの人間と同じ方向へ、自分で舵を取ることなく流れて生きていくのは、世界における状況の選択肢のない人々に対して失礼なことである。誰かに属し、従属的になるのではなく、自発的に行動すること。そしてそのチャンスを生かすこと。「なんとなく」生きてはいけない。目的と、目標をもち、そのために必要な道や社会へうまく<I>と<me>のバランスを考え適応していくことが大切なことである。この報告は、全ての段階を踏まえて一番私が感じた事を提示し、ここに締めくくりたい。

## 7 あとがき

以上が私のIとMeへの報告である。しかし、このような形での論文を書くことは、卒業論文提出の一週間前に決まったことであり、いささか、不納得な部分が全く無いとは言いきれない。特に、フィールドワークに関しては、過去外国で出会ってきた異文化圏の人々約100人程の記録があるが、この論文では、指定のため心を鬼にして一人に絞っている。



しかし、一人だけのサンプルから、自分自身の変化を描くことは難しいことであり、少々不自然な形になっている事が否めない。また、前後の流れを考察するものであるが、この論文に、帰国後の再適応を入れることで、流れを一つにまとめるのが難しく、少し無理な形になっている。個人的には、異文化からの影響の段階までで、一つの報告をまとめる事が理論が通った形になると思えた。そうでなければ、どのような形で結論を出すべきなのか、とても判断に難しい結果となってしまった事は否めない。

#### [注]

- 1) 集団主義とは、一口で言って個人の利益より集団の利益を重んじる思想である。個人よりも集団に価値を置く、あるいは自分の利害よりも自分の属する集団の利益を優先する価値観。それに道徳的意味が加わって、そうするのが「望ましい」とか「善いことだ」という考え方である。
- 2) この日記は、筆者本人が実体験を元に2006年2月12日に執筆。
- 3) この日記は、筆者本人が実体験を元に2006年1月30日に執筆。
- 4) この日記は、筆者本人が実体験を元に2007年10月30日に執筆。

#### [文献]

- 浅野智彦, 2001, 「自己への物語論的接近——家族療法から社会学」勁草書房
- 浅野智彦, 2004, 「自我の社会学」(「社会学がわかる本」), AERA 朝日新聞社
- 浅野智彦, 2003, 物語と〈語りえないもの〉『年報社会科学基礎論研究』第2号(2003)、ハーベスト社、p096-113
- 船津衛, 1997, 『G. H. ミードの世界——ミード研究の最前線』恒星社厚生閣. 156 頁-172 頁 156-172
- 片倉もと子, 1991, 「イスラームの日常世界」, 岩波新書年
- 北山忍・宮本百合, 2000, 「文化心理学と洋の東西の巨視的比較: 現代的意義と実証的知見」心理学評論, 43, 57-81
- 北山忍・高木浩人・松本寿弥, 1995, 「成功と失敗の帰因: 日本の自己の. 文化心理学」心理学評論, 38, 247-280

Mead, Gerge, Herbert, 1934, *Mind, Self, and Society*; from the standpoint of a. Social Behaviorist, The University of Chicago Press. (=1973, 稲葉三千男・滝. 沢正樹・中野収訳『現代社会学大系 10 ミード 精神・自我・社会』青木書店.)

三井宏隆著, 2005, 「比較文化の心理学ーカルチャーは社会を越えるのか」, ナカニシヤ出版

奥村隆編, 1997, 「社会学に何ができるか」八千代出版、pp. 115-154

落合恵美子, 2004, 「オーラルヒストリー」(「社会学がわかる本」), AERA 朝日新聞社

落合恵美子, 1997 「21世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・越えかた」, 有斐閣

Whyte, William Foote, [1943]1993, *Street Corner Society*, 4th ed., Chicago: University of Chicago Press. (=2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣.)

#### **特記事項**

(40字×30字)総 39 頁:31251 文字 400 字詰め原稿:78 枚